

# 慶長末年までの水指・建水

—出土資料を中心に—

Mizusasi and Kensui till the End of the Keicho Period:

Focused on Excavated Materials

Eiji Hatanaka 畑中 英二

## はじめに

前稿「考古学からみた和物茶陶の創出とその担い手 —水指・建水を中心に—」(畑中 2016)において、15 世紀後半から 16 世紀後半にかけての戦国時代における日本列島産の水指・建水といった喫茶に用いる焼物(広い意味での和物茶陶)の出土資料を検索し、検討を加えた。

その結果、当時の茶陶は、主に信楽・備前・瀬戸美濃窯で専らつくっていたが、当時の茶会記には天正 15 年以前には信楽・備前焼しか登場しないことから、当時の喫茶に多様性があることを想定した<sup>1)</sup>。また容量の検討から、信楽窯では水指を、備前窯では建水と水指を専らつくっていたことが出土資料から明らかにでき、茶会記においても同様であることが確認できた。これらの窯が申し合わせて棲み分けたのではなく、茶人や商人が何らかの意図のもとに発注した結果であると考えた。

本稿では、前稿に続く 16 世紀末から 17 世紀初頭にかけての出土資料を検索し、その後の日本列島産の水指・建水といった喫茶に用いる焼物の在り方について検討を加えようとするものである。ここでの出土資料検索の対象は、放棄(廃棄)年代が比較的明らかで、かつ出土量の多い大坂城および堺環濠都市遺跡関係のものを対象とする<sup>2)</sup>。

なお、喫茶そのものが指す内容は広く、茶会記が記す茶湯はその中に含まれる。出土資料が茶湯に用いられたものかどうかを明らかにし得ないこともあり、広く喫茶に用いられた伝世する焼物に類するものを「茶陶」とみなし、論を進めることにしたい。また、産地を示す際には「～窯」、その産地で生産されたものは「～焼」と呼称する。

本稿で取り扱う水指と建水について簡単にみておこう。水指は釜の湯を補うほか茶碗や茶筌を漱ぐ水を入れ

ておく器で、建水は茶碗を清めた湯や水を捨てる器である。つまり、茶会においては最初から水が入っているのが水指で、最終的に水で満たされるのが建水であり、両者ともに水を貯めおく容器である。それ故に機能上の差異はなく、特定の使用痕がみられる訳ではないことから出土資料の場合は両者を区別する術を持たない。また、出土状況等の考古学的知見から用途の検証を試みようとしても、それを明快にすることは極めて困難である。

故にここでは伝世品の形態・法量を参照しつつ、それに類するものを水指・建水と想定し、出土資料の集成を試みることにしたい。伝世品を参照すると、法量の大小で分けることはできそうであるが、ひとまず、水指と建水を分けることなく、資料の分析を経て機能を想定することにしたい。

ここでの集成は、伝世品の水指・建水の形態・法量に類似するものを対象としたものであるもので、それ以外のものが用いられていた可能性は否めない。また、伝世品のそれに類似するといえども、それらが水指・建水として用いられていたかどうかは厳密には明らかにし得ない。それ故、当時の全体像を復元することは不可能であることを先に断わっておく。

## 1. 16 世紀末から 17 世紀初頭における水指・建水出土資料の集成と整理

ここでは 16 世紀末から 17 世紀初頭における水指・建水と想定できる出土資料を集成し整理を試みる。放棄(廃棄)年代が比較的明らかで、かつ出土量の多い大坂城および堺環濠都市遺跡を対象にしたもので、結果的に信楽(伊賀)・備前・瀬戸美濃・唐津窯のものが検索できた。

先の形態分類(畑中 2016)に、この時期から出現する類型を加え、生産地別に類型区分ごとの口径・器高・容

量について記すこととする。容量については実測図からその概数を求めたものである。

#### (1) 水指・建水の形態分類

##### I－1 類

筒状をなし、口径に対する器高の比率が5割を切る平らなもの。

##### I－2 類

筒状をなし、口径に対する器高の比率が5～7割の浅いもの。

##### I－3 類

筒状をなし、口径に対する器高の比率が7割以上の深いもの。

##### II－1 類

鉢形をなし、体部最大径に対する器高の比率が5割を切る浅いもの。

##### II－2 類

鉢形をなし、体部最大径に対する器高の比率が5割以上の深いもの。

##### III－1 類

壺形をなすもの。頸部がつくもの。茶陶であるかどうか判断に迷うものが多く含まれる。

##### III－2 類

壺形をなすもの。頸部がつかないもの。器高の高いものと低いものがある。

##### III－3 類

壺形をなすもの。肩が張り、算盤珠状をなすもの。

##### IV－1 類

播鉢と同様の形態をとるもの。

##### IV－2 類

播鉢形とは異なる器の内面に播鉢様の播目を入れるものの。

##### V 類

鼓形（或いは芋頭形）のもの。

##### VI－1 類

筒状を基調としつつ変形させているもので、口径に対する器高の比率が5割を切る平らなもの。

##### VI－2 類

筒状を基調としつつ変形させているもので、口径に対する器高の比率が5～7割の浅いもの。

##### VI－3 類

筒状を基調としつつ変形させているもので、口径に対する器高の比率が7割以上の深いもの。

※なお口縁部の形態については、矢筈口にしているものは「a」とする。

#### (2) 伊賀・信楽焼

##### I－3 類 (1,2)

堺環濠都市遺跡 (SKT263) SB1 (1)、大坂城 (大阪府庁) 土坑 53 上層 (2) 出土資料がある。口径約 24cm、器高 20cm を超える。容量は約 10L (想定復元) である。この時期には稀な大法量であるが、15 世紀後半以降につくられている形態であり、16 世紀末から 17 世紀初頭にかけてつくられたものであるかどうかは判断できない。

##### III－1 類 (3)

堺環濠都市遺跡 (SKT874) 建物 4120 (3) 出土資料がある。口径約 30cm、器高約 8cm、容量は約 5L である。

##### VI－1 類 (4,5)

大坂城 (NW05-9) SM534 (5)、同 (大阪府警 II) 濠 83 (4) 出土資料がある。口径約 16cm、器高約 8～10cm、容量は約 1L である。いずれも 16 世紀後半までにはみられなかった形態である。

##### VI－3 類 (6,7)

堺環濠都市遺跡 (SKT346) SB107 (6)、同 (SKT263) SB1 (7) 出土資料がある。いずれも矢筈口であり「a」形態である。口径約 14～15cm、器高約 20cm、容量は約 3～4L である。いずれも灰釉を掛けている。

(8,9) は、矢筈口に伴うと考えられる蓋である。いずれも堺環濠都市遺跡 (SKT346) SB107 出土資料である。口径約 10～12cm、器高約 3cm である。

(10～12) は、全体形状は明らかではないが VI－3 類のものとみられる。いずれも大坂城 (OS96-30) 第 3 層出土資料である。(10) は、五島美術館蔵「破袋」に似るか。

いずれも 16 世紀後半までにはみられなかった形態である。

#### (3) 備前窯

##### I－1 類 (13)

大坂城跡 (大阪府警) 土坑 538 (13) 出土資料がある。口径約 17cm、器高約 8cm、容量は約 2L である。15 世紀後半以降にみられる形態である。

##### I－2 類 (14,15)

堺環濠都市遺跡 (SKT263) SB3 (14)、大坂城 (中央体育館) SE523 (15) 出土資料がある。口径約 12～15cm、器高 9～11cm。容量は約 1～2L である。15 世紀後半以降にみられる形態である。

##### I－3 類 (16～22)

法量の大小がある。

小さいものには堺環濠都市遺跡 (SKT787) C-2 杭南西部第 2 層 (16)、同 (SKT655) 第 3 次整地層 (17)、大坂城 (大阪府警) 11・12 層 (18)、同 (中央体育館) SK539 (19) 出土資料がある。口径約 11～14cm で器高約 10～12cm、容量は約 1～2L である。

大きいものには堺環濠都市遺跡 (SKT9) SB301 (20)、同 (SKT263) SB3 (22) 大坂城 (OS87-33) SE201 (21) 出土資料がある。口径約 20~25cm、器高約 8cm、容量約 5~8L である。(20) ~ (22) は、この時期には稀な大法量であるが、15 世紀後半以降つくられている形態であることから、16 世紀末から 17 世紀初頭にかけてつくられたものであるかどうかは判断できない。

#### I - 3a 類 (56~58)

堺環濠都市遺跡 (SKT263) SB1 (56,58)、同 (同) SB3 (57) 出土資料がある。口径約 16~18cm で器高約 16~20cm、容量は約 3~4L である。(57) には篋目などがみられる。いずれも 16 世紀後半までにはみられなかった形態である。

#### II - 1 類 (29~46)

この類型のうち、口縁部の形状、形態の浅深でさらに細分することができる。

まず、器高が口径の 3 割以上 5 割未満のもので、口縁部を丸くおさめるものは、大坂城 (中央体育館) SE521 (29)、同 (中央体育館) SK515 (30)、同 (大阪府警) 10 層 (31)、同 (同) 土坑 598 (33)、同 (同) 第 6 層 (34)、(同) 土坑 588 (33)、同 (同) 土坑 645 (36)、同 (成人病センター) 199 土坑 (32)、同 (大阪府庁) 7 層上層 (35) 出土資料があり、口径約 16~18cm、器高約 5~8cm、容量約 1L である。

器高が口径の 3 割以上 5 割未満のもので、口縁部が玉縁状になるものは、堺環濠都市遺跡 (SKT263) SB1 (37)、大坂城 (大阪府警Ⅱ) 濠 83 (38) 出土資料があり、口径約 16~17cm、器高約 6~7cm、容量約 1L である。

次いで、器高が口径の 3 割未満のもので、口縁部を丸くおさめるものは、大坂城 (OS97-1) SD207・6 層 (39)、同 (中央体育館) SK513 (40)、同 (同) SK515 (42)、同 (OS89-74) SK508 (41)、堺環濠都市遺跡 (SKT9) SB301 (43) 出土資料があり、口径約 18~25cm、器高約 4~5cm、容量約 1L である。

器高が口径の 3 割未満のもので、口縁部が玉縁状になるものは、堺環濠都市遺跡 (SKT263) SB3 (44)、大坂城 (OS89-74) SK508 (45) 出土資料があり、口径約 19~21cm、器高約 5~6cm、容量約 1L である。

このほかに、大坂城 (中央体育館) SE520 (46) 出土資料に、口縁部が屈曲するものがある。

#### II - 2 類 (47~49)

口縁部を丸くおさめるものに、堺環濠都市遺跡 (SKT263) SB3 (47)、大坂城 (中央体育館) SK522 (48) 出土資料があり、口径約 12~13cm、器高約 7cm、容量約 1L である。

口縁部を玉縁状にするものに、大坂城 (中央体育館) SK515 (49) 出土資料があり、口径約 15cm、容量は約 1L

であるとみられる。

#### III - 1 類 (60~63)

堺環濠都市遺跡 (SKT448-2) SD04 (60)、同 (SKT263) SB3 (61,63)、大坂城 (中央体育館) SE522 (62) 出土資料がある。口径約 13~20cm で器高 13~17cm、容量は約 1~5L である。

#### III - 3 類 (64)

堺環濠都市遺跡 (SKT9) SB301 (64) 出土資料がある。口径約 9cm、器高約 9cm、容量約 1L である。

#### IV - 1 類 (23)

堺環濠都市遺跡 (SKT655) 第 3 次整地層 (23) 出土資料がある。口径約 17cm、器高約 6cm、容量約 1L である。一般的にみられる挿鉢とは形態がやや異なるが、とりあえずこの類型に入れておく。

#### IV - 2 類 (24,25)

大坂城 (中央体育館) SK513 (24)、同 (成人病センター) 226 土坑 (25) 出土資料がある。口径約 17~18cm、器高約 6cm、容量約 1L である。形態は (23) に類似するが、内面の擦目は櫛描き波状文となっている。

#### V 類 (26~28)

堺環濠都市遺跡 (SKT448-2) SB04 (26)、同 (SKT9) 落ち込み (27)、大坂城 (中央体育館) SK515 (28) 出土資料がある。前二者は芋頭状で法量の大小がある。小さいものは口径約 14cm、器高約 16cm、容量約 2L で、大きいものは口径約 22cm、器高約 23cm、容量約 9L である。また、下半部が欠失していることから全体形状は明らかではないが、(26,27) のように、体部が直線的にならないものもみられる (28)。

#### VI - 1a 類 (50)

大坂城 (大阪府警Ⅱ) 堀 83 出土資料がある (50)。口径約 17cm、器高約 8cm、容量約 2L である。体部には凸線および篋目が施される。矢筈口であり「a」形態である。

#### VI - 2 類 (51,52)

堺環濠都市遺跡 (SKT655) 第 3 次整地層 (51)、同 (SKT9) 第 3 包含層 (52) 出土資料がある。口径約 16~17cm、器高約 9~10cm、容量約 2L で体部には凹凸、タタキ目が施される。

#### VI - 3 類 (53~55)

器高の高低がある。

低いものは堺環濠都市遺跡 (SKT263) SB1 (53)、同 (SKT874) Ⅲ区第 2 層 (54)、出土資料がある。口径約 13~15cm、器高約 10~11cm、容量約 2L である。体部には凹凸、灰釉がかけられる。(53) は矢筈口で「a」形態である。

高いものは堺環濠都市遺跡 (SKT9) 第 3 包含層 (55) 出土資料があり、口径約 11cm、器高約 17cm、容量約 3L である。矢筈口で「a」形態である。



#### (4) 瀬戸・美濃窯

大坂城（中央体育館）SK525（65）、同（同）SK522（66）は、何れも体部下半が欠失していることから全体形状は明らかではないが、Ⅰ類であると考えられる。

##### Ⅰ－１類（72）

堺環濠都市遺跡（SKT263）SB1（72）出土資料がある。口径約18cm、器高約7cm、容量約2Lである。黄瀬戸釉を掛ける。

##### Ⅰ－３類（67～69、73）

法量に大小がある。

法量の小さいものは、大坂城（府警Ⅱ）堀83（73）出土資料がある。口径約14cm、器高約11cm、容量約2Lである。無釉焼締である。

法量の大きいものには、堺環濠都市遺跡（SKT263）SB1（67）、同（同）SB3（68）、同（SKT47）SB04（69）出土資料がある。口径約15～17cm、器高約16～18cm、容量約3Lである。外面に鉄釉を掛ける。

##### Ⅲ－１類（70,74）

体部の形態で分類することができる。

直線的な体部のものは、堺環濠都市遺跡（SKT900）SB102焼土層（70）出土資料がある。口径約15～17cm、器高約16～17cm、容量約3～4Lである。黄瀬戸釉を掛ける。

丸みを帯びた体部のものは、大坂城（中央体育館）SK513（74）出土資料がある。口径約18cm、器高約10cm、容量約2Lである。無釉焼締である。

##### Ⅴ類（71）

堺環濠都市遺跡（SKT263）SB3（71）出土資料がある。口径約12cm、器高約17cmに復元でき、容量約3Lである。口縁部直下に円形の浮文、体部に取手状のものを貼りつける。鉄釉を掛ける。

##### Ⅵ－3a類（75）

堺環濠都市遺跡（SKT202）SB07（75）出土資料がある。口径約16cm、器高約17cm（想定復元）、容量約3L（想定復元）である。体部外面には埴田文が施され、透明な釉を掛ける。いわゆる美濃伊賀である。矢筈口であり「a」形態である。

#### (5) 唐津・高取窯

##### Ⅰ－３類（76）

大坂城（立体駐車場）2010溝最上層（76）出土資料がある。口径約16cm、器高約16cm（復元）、容量約3Lである。口縁部に縁帯を設ける鬼桶風である。

##### Ⅱ－２類（85）

形態としては、この類型に属することになるが、本例は趣を異にしている。大坂城（OJ92-1）第5層（85）出土資料がある。口径約19cm、器高約13cm（想定復元）、容

量約4L（復元）である。山水文を描く。

##### Ⅵ－2a類（77）

堺環濠都市遺跡（SKT900）SB102焼土層（77）出土資料がある。口径約18cm、器高約9cm、容量約2Lである。矢筈口であり「a」形態である。

##### Ⅵ－３類（78～84、86）

法量に大中小がある。

法量の小さいものは、大坂城（OJ92-1）第5層（78）出土資料がある。口径約13cm、器高約17cm、容量約2Lである。体部外面に波状文を施す。

法量の中ほどのものは、大坂城（OS86-34）SX502（79）、堺環濠都市遺跡（SKT787）SB201（80）、同（SKT47）SB04（81）、同（SKT263）SB3（83,84）出土資料がある。口径約16～18cm、器高約17～18cm、容量約4Lである。体部に波状文や沈線を施す。（83）は成形後に体部を変形させている。体部内面に同心円当て具の痕跡がみえるものが多い。

法量の大きいものは、大坂城（NW05-9）SM581（82）出土資料がある。口径約21cm、器高約20cm、容量約6Lである。体部に波状文を施す。体部内面に同心円当て具の痕跡がみえる

堺環濠都市遺跡（SKT263）SB3（86）はこれらに伴う蓋である。

## 2. 資料の検討－形態と容量からみた慶長年間までの水指・建水－

### (1) 水指・建水の新たな形態

瀬戸・美濃においては瀬戸黒、黄瀬戸、志野、織部が、京都において軟質施釉陶器が登場する。また、唐津、高取、薩摩、萩などの諸窯が新たに開かれる。加えて従来より生産は行われていたものの、領主肝いりでブランディングされた伊賀がみられる。他には、備前や信楽など従来からの生産を続ける窯場がある。前段階と比較すると、極めて新しい流れであることを理解しなければならない。

伊賀・信楽焼は砂粒を多く含む陶土に橙色系の素地の焼締に灰釉や鉄釉をワンポイントで用いる。備前焼は茶色系の素地の焼締を基調とする。伊賀・信楽焼と備前焼はいずれも壺甕揃鉢の焼締を専らとするが、陶土及び焼成方法の違いから色調・質感が全く異なり、その差異は際立つ。瀬戸・美濃焼は釉薬によって多くのバリエーションを持ち、天正年間までの灰釉・鉄釉に加えて黄瀬戸・志野・織部がみられる。また、伊賀焼風の美濃伊賀も創出する。唐津・高取焼は、灰釉・鉄釉とともに鉄絵で文様を描くものがみられる。施釉を基調とする点と小物の食器を多くつくりだしているところに共通点がある。た

だし、陶土が異なることから、同様の釉薬を掛けても、全く雰囲気異なるものが出来上がることになる。

この時期の水指・建水は矢筈口や体部装飾など共通する部分が多くなり、実測図レベルでは産地を推し量る術はないのであるが、先に述べた要素から実見すると、産地の同定はおおよそ可能である。

窯毎の個性が確立したのだと言えよう。

そこで、天正年間から慶長年間にかけて出現する水指・建水の形態に目を向けると、口縁部の矢筈口（共蓋が伴う）、耳がつく、体部の装飾（段や沈線、篋目、叩き、施釉など）といった点に集約できよう。

天正年間までは、水指にかんしては苧桶や雷盆、建水では南蛮甕の蓋、棒の先、面桶、合子などを祖形として陶製のものをつくりだしていた（畑中 2016）ことから比較すると、祖形は判明しないものの新たなものである事に気づく<sup>3</sup>。

加えて、着目すべき点がある。

ここで取り上げた資料のうち、焼成中に変形してしまったとみられるもの（5）や意図的な変形が加えられたもの（83）も僅かながらみられる。また、この時期に見出され、伝世している水指・建水・花入の中には焼成中に変形したものが散見される。著名なものとしては、柴庵（東京国立博物館蔵）、破袋（五島美術館蔵）、生爪（畠山記念館蔵）などを挙げることができる。この時期以前にはみられなかった傾向であると看做してよく、生産・流通の構造に変化が生じたと捉えて良いだろう。これに関わるとしき事例がある。京都三条のせと物や町から出土した資料には焼成中に融着してしまったものを多く含むほか窯道具も出土しており、窯場から窯詰め状態で京都の小売店に持ち込まれたのちに選別されたことを物語っている（京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 編 2016）。ここでは、商品にならなかったものが廃棄されているので、商品の姿を直接見ることはできないが、この時期の消費遺跡や伝世品にみられるように、多少の歪みや破損は物ともせず流通していたことがわかる。つまり、従来は失敗品として窯場で廃棄されたものが“商品”として流通し始めたと考えることができるのである。さらにはせと物や町として同業者が軒を連ねていることにも着目したい。小売業者が軒を連ねることにより競合が生じ、各業者は競争力が高いものを売り出すことを余儀なくされるのである。多彩な桃山期の茶陶にはこういった流通機構によって生み出された可能性があるのではないだろうか。この点については、かかる資料の詳細な分析により明らかにできると考えられる。

## (2) 出土資料の容量と伝世品の水指・建水の容量

天正年間までの水指・建水の容量については、1L 前後・

3L 前後・4L 以上の3群を見出すことができた（畑中 2016）。一方、慶長年間までのものは、1～4L までのもの（細分することは可能）と、それ以上のものがみられる。これを詳しくみると、天正年間後半以降に出現したと考えられる新しい形態は、1～4L までで占められ、例外的に6L のものが僅かにみられるに留まる。つまり、新たにつくりだされた形態のものは、中・小の法量のみが求められていた可能性がある。換言すると、この時期の大坂・堺の茶の湯は、大法量の水指（建水）を必要としなかった可能性がある。なお、それ以前からみられる形態は1～10L と幅がある。今回の資料集成は消費地資料を対象にしていることから、これらがアンティークか否かを判断することは難しく、また、アンティーク風につくる際には大法量にした可能性を想定しておく必要がある。

そこで、出土した水指・建水と考えられるものの容量を考えるために、伝世品の水指・建水のそれをみてみることにしよう。

天正年間以降につくりだされたと考えられる建水の容量は1～2L 前後、水指は2～4L 前後が中心となり、5L 前後のものが稀にみられる（矢部 2000）これは出土資料の容量を確認する中で見出した傾向に沿うもので、この時期の水指・建水の一般的な容量を示しているといえるだろう。換言すると、4L を越えるような大容量のものは残るものの、天正年間以前と比較すると、圧倒的に用いられる場が減少したといえるだろう。

そこで、水指・建水が用いられる茶室の規模に着目してみよう。

まずは利休以前の茶室について列記する。『山上宗二記』には「珠光は四畳半、引拙は六畳敷なり」とあり、紹鷗の四畳半が図入りで示されている。『二水記』には、宗味は「四畳半敷六畳鋪」の茶屋であったとする。『宗長日記』には、大永6年の時点で四畳半や六畳の座敷で茶事が行われていたとする。一方、名物を持たない侘び茶人の間においては、二畳や三畳の小間で茶事を行っていたのを利休は取り入れたとし（『山上宗二記』）、三畳台目の表千家不審庵や金地院八窓席、二畳台目の如庵、二畳の妙喜庵待庵、更には利休の聚楽屋敷には一畳台目の茶室といったように、小間の茶室が盛んにつくられたようだ。その後、三畳台目に相伴席が設けられた藪内燕庵や八畳に手前座と三畳の相伴席が設けられた孤篷庵忘筌庵などがつくられるようになった。つまり、茶室には大小があって、16世紀後半から17世紀初頭にかけて小間が流行したといえる。小間の茶室に大ぶりの道具は馴染まないとする考え方はあったのかもしれない。さらに、茶室の規模は招かれる客の数にも対応するものであり、小間での茶事には大ぶりの水指・建水は必要ないと考えられたかもしれない。

先に慶長年間までの水指・建水とみられる出土資料の容量についてみてきたが、16世紀後葉（天正年間後半以降）には大法量の水指が確実に減少することが確認できる。これは、小間の茶室での茶事の盛行にかかわるものである可能性を想定しておきたい。

## おわりに 本稿で明らかにしたことと今後の課題

本稿では、放棄（廃棄）年代が比較的明らかで、かつ出土量の多い大坂城および堺環濠都市遺跡関係の水指・建水を対象とする16世紀末から17世紀初頭にかけての出土資料を検索し検討を加えた。その結果、前稿で取り扱った16世紀後葉までの出土資料とは様相が一変することが明らかとなった。一つは、形態である。16世紀後葉までは金属をはじめとする他の素材や茶陶に用いられなかった陶磁器を模倣対象としたものであったが、16世紀末以降に登場するものは、祖形が判然としなない。まさに「創出」されたものとみてよいのだろう。もう一つは、容量である。4Lを超える容量の水指が新たに作り出されなくなったことから、茶事の在り方が大きく変容した可能性を想定した。

一方、本稿で明らかにしたこととともに今後の課題も明らかとなった。16世紀後葉までにはみられなかったものとして、意図的な変形が加えられたものに加えて、焼成中に変形してしまったとみられるものまで流通していることが明らかになった。ここでは、三条せと物や町出土資料を例に挙げて流通機構の変化にその要因を想定したが、本資料については詳細な分析がおこなわれていない。所謂桃山茶陶の創出を明らかにするべく、調査・研究を進めていくこととしたい。

## 註

- 1 『松屋会記』に「宗易形ノ茶碗」が登場するのも天正14年、またこの年以降「今焼茶碗」「黒茶碗」「黒焼茶碗」「瀬戸茶碗」が頻出するようになる。また、備前筒花入の初出もまた天正14年で、茶室の床の間の用いられ方が変化したものと考えられている（赤沼2012）。
  - 2 今回取り扱った大坂・堺における慶長末年までの資料については、年代を特定し得る材料が揃っている。一般的には生産されてから廃棄されるまでの時間を見積もることが困難であるが、ここで提示するものの多くは慶長20年の大坂夏の陣において被災し、放棄されたものであるから少なくとも廃棄年代は明らかである。先に述べた天正年間頃の資料群（畑中2016）と比較することによって、16世紀末から17世紀初頭にかけてつくりだされたものを抽出することは十分に可能である。加えて、被災資料であることから、放棄に選択があった可能性は極めて低い。さらに、大阪・堺といった富裕層が多く居住していた地域であることから、質・量ともに豊富であり、資料的な価値は高い。
- ただし、大坂・堺といった局所的な事例であり、かつ、全て

の資料を発掘した訳でもない。あくまでも現時点での傾向を見出し、それらを踏まえて考察することを主眼としたい。

- 3 茶会記などの諸史料からは、残念ながら「○○形の水指」といった記述を見出すことができず、これらの祖形を明らかにすることは今後の課題であるといえる。

## 引用・参考文献

- 赤沼多佳 1995「水指の変遷と種類」『水指 茶席の水器』茶道資料館, 87-107 頁
- 赤沼多佳 2012「桃山時代の茶陶」『京三条せともの屋町』茶道資料館, 150-153 頁
- 岡 佳子 2013「第二節 信楽茶陶の世界」『甲賀市史』第5巻 信楽焼・考古・美術工芸, 甲賀市, 54-87 頁
- 上條さおり 1995「茶会記にみる水指一覧」作成にあたって『水指 茶席の水器』茶道資料館, 109-139 頁
- 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 編 2016『京都市文化財ブックス第30集 三条せと物や町：桃山茶陶』
- 下村菜穂子 2012「茶会記にみる備前焼建水」『備前歴史フォーラム 2011 備前と茶陶～茶道の視点 考古学の視点』備前市教育委員会生涯学習課, 91-101 頁
- 下村菜穂子 2015『備前焼茶道具の研究』法蔵館
- 畑中英二 2012「備前茶陶の基礎研究——六世紀における水指・建水について——」『淡海文化財論叢』第四輯, 淡海文化財論叢刊行会, 272-277 頁
- 畑中英二 2013「第一節 信楽焼の考古学」『甲賀市史』第5巻 信楽焼・考古・美術工芸, 甲賀市, 8-53 頁
- 畑中英二 2014「瀬戸・美濃窯における水指・建水の基礎研究」『淡海文化財論叢』第七輯, 淡海文化財論叢刊行会, 111-116 頁
- 畑中英二 2016「考古学からみた和物茶陶の創出とその担い手」『中近世陶磁器の考古学』第四巻、雄山閣、103-124 頁
- 矢部良明 2000『茶道具の世界 11 水指 建水』淡交社

## 図版出典

- 1・7・14・22・37・44・47・53・56～59・61・63・67・68・71・83・84・86、堺環濠都市遺跡 SKT263（堺市教育委員会 2004『堺市文化財調査概要報告 第103冊』）
- 2・35、大坂城 大阪府庁（大阪府文化財センター 2002『大坂城跡発掘調査報告Ⅰ』）
- 3・54、堺環濠都市遺跡 SKT874（堺市教育委員会 2005『堺市埋蔵文化財調査概要報告 第109冊』）
- 5・82、大坂城 NW05-9（大阪市文化財協会 2008『難波宮址の研究』第十五）
- 4・38・50・73、大坂城 大阪府警Ⅱ（大阪府文化財センター 2006『大阪府文化財センター調査報告書第144集 大坂城址Ⅲ』）
- 6・8・9、堺環濠都市遺跡 SKT346（堺市教育委員会 1993『堺市文化財調査概要報告 第38冊』）
- 10～12、大坂城 OS96-30（大阪市文化財協会 1999『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1996年度—』）
- 13・18・31・33・34・36、大坂城 大阪府警（大阪府文化財調査研究センター 2002『大坂城跡発掘調査報告書Ⅱ』）
- 15・19・24・28～30・40・42・46・48・49・62・65・66・74、大坂城 中央体育館（大阪市文化財協会 1992『難波宮址の研究』第九）
- 16・84、堺環濠都市遺跡 SKT787（堺市教育委員会 2002『堺市文化財調査概要報告 第98冊』）
- 17・23・51、堺環濠都市遺跡 SKT655（堺市教育委員会『堺市文化財調査概要報告 第77冊』）
- 20・27・43・52・55・64、堺環濠都市遺跡 SKT9（堺市教育委員



会 1980『堺市文化財調査報告 第 6 集』)  
21、大坂城 OS87-33 (大阪市文化財協会 2003『大坂城址Ⅶ』)  
25・32、大坂城 成人病センター (大阪府文化財センター 2015  
『大阪府文化財センター調査報告書 第 253 集』)  
39、大坂城 OS97-1 (大阪市文化財協会 1999『大坂城跡Ⅳ』)  
41・45、大坂城 OS89-74 (大阪市文化財協会 2002『大坂城跡Ⅵ』)  
26・60、堺環濠都市遺跡 SKT448-2 (堺市教育委員会 1995『堺市  
文化財調査概要報告 第 49 冊』)  
72・83、堺環濠都市遺跡 SKT47 (堺市教育委員会 1987『堺市文

化財調査報告 第 35 集』)  
70・77、堺環濠都市遺跡 SKT900 (堺市教育委員会 2005『堺市埋  
藏文化財調査概要報告 第 109 冊』)  
75、堺環濠都市遺跡 SKT202 (堺市教育委員会 1989『堺市文化財  
調査報告 第 49 集』)  
76、大坂城 立体駐車場 (大阪府文化財センター『大阪府文化  
財センター調査報告書 第 254 集 大坂城跡 5』)  
78・85、大坂城 OJ92-1 (大阪市文化財協会 2004『大坂城下町跡』)  
79、大坂城 OS86-34 (大阪市文化財協会 2002『大坂城跡Ⅵ』)

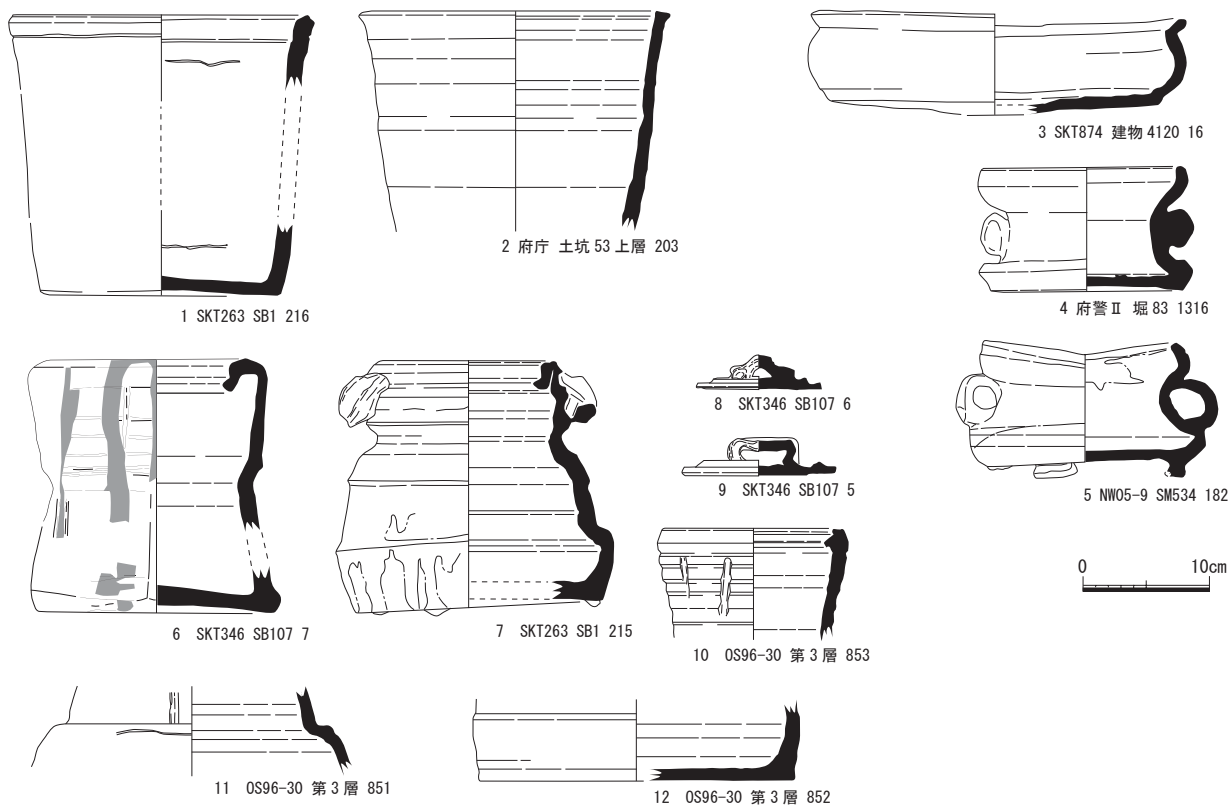


図1 伊賀・信楽焼の茶陶

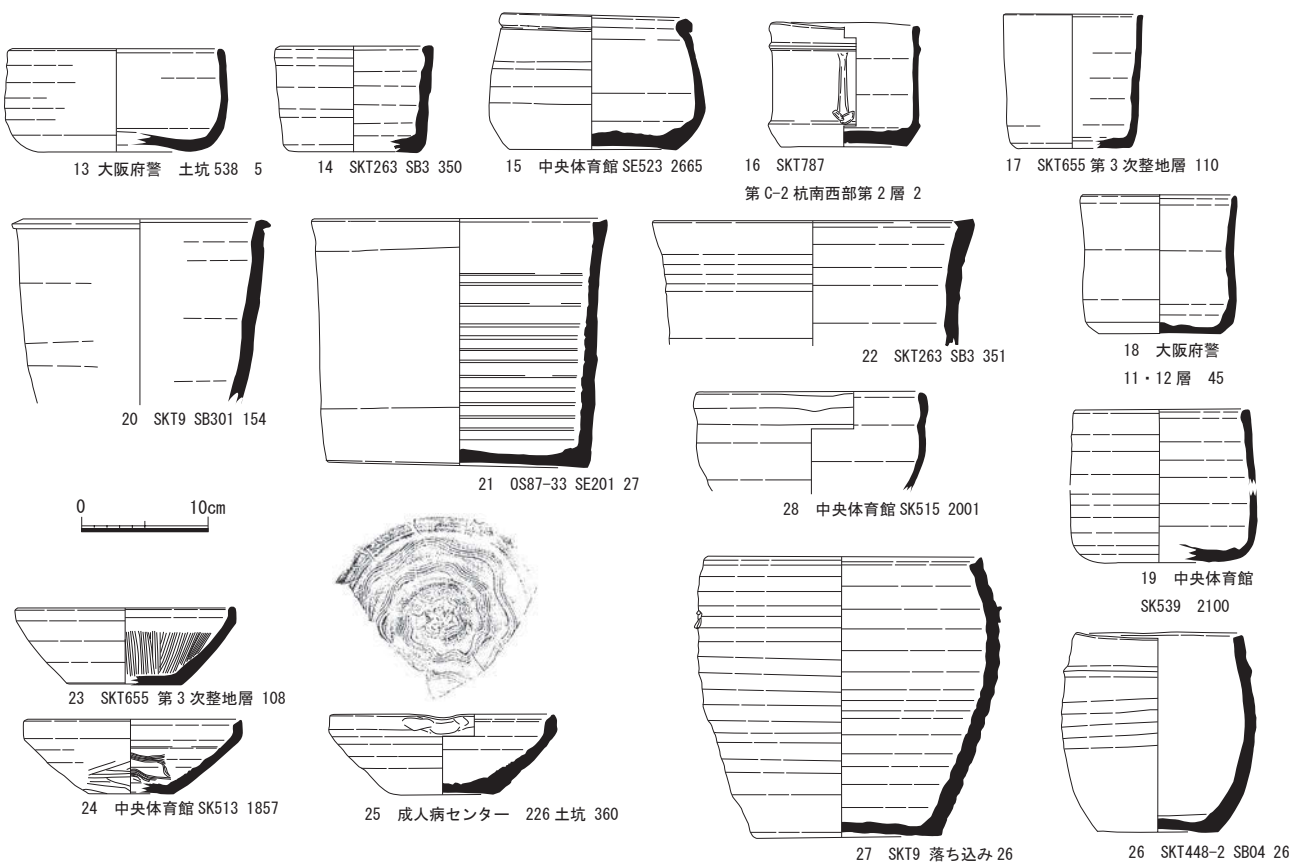


図2 備前の茶陶 (1)



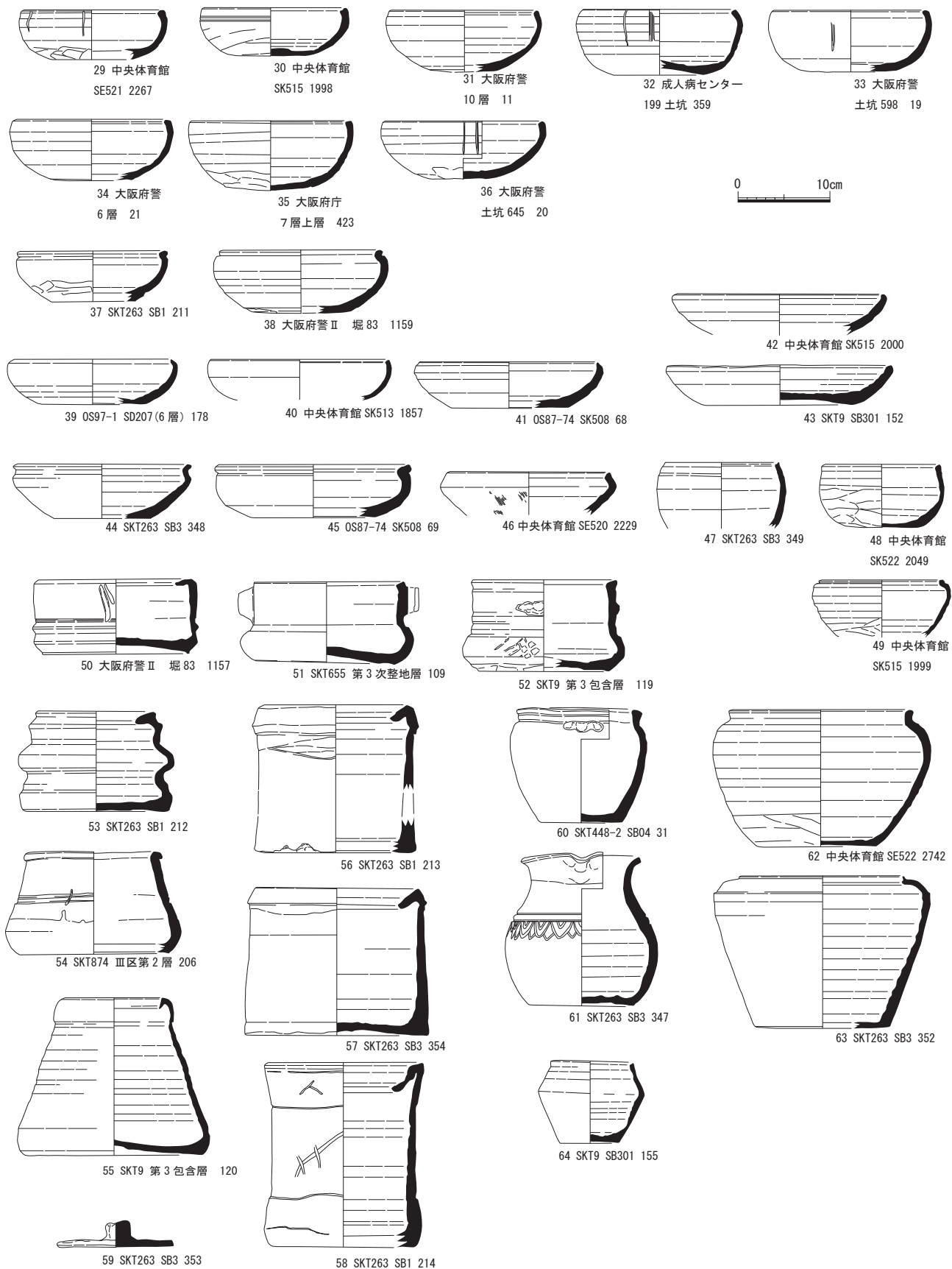


図3 備前の茶陶 (2)

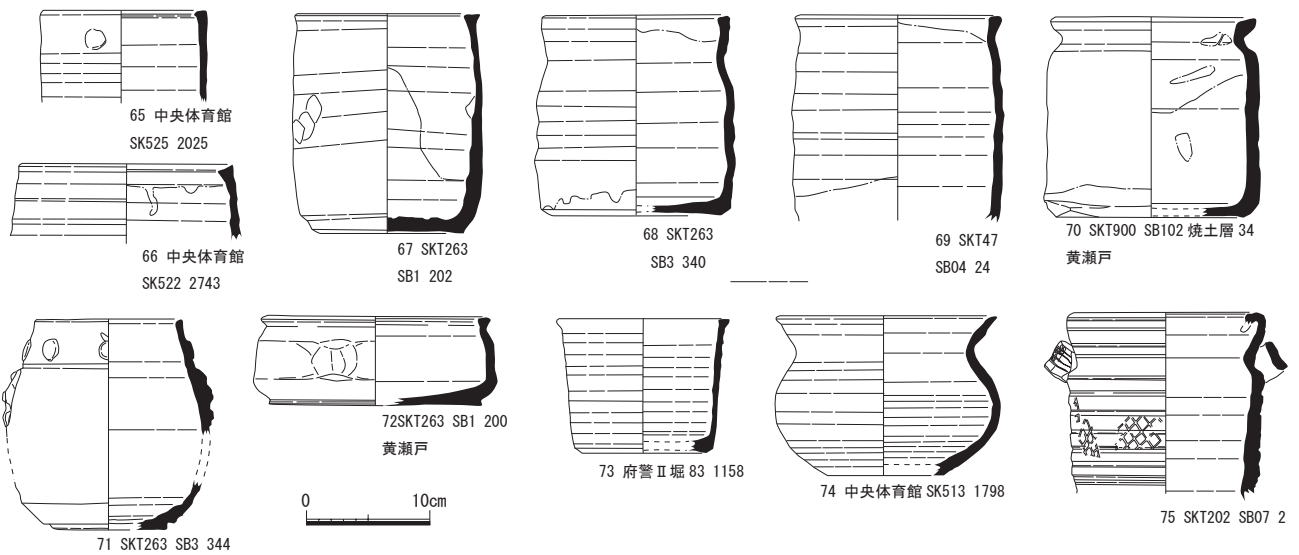


図4 瀬戸美・濃焼の茶陶

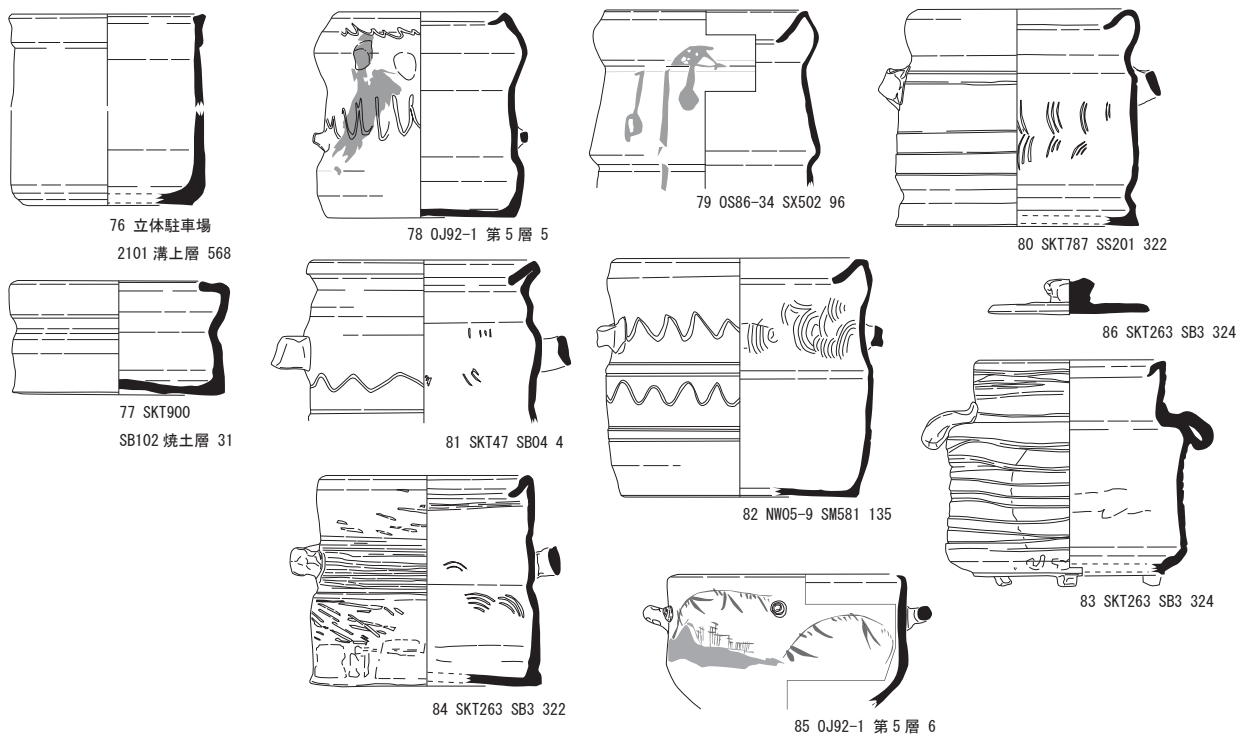


図5 唐津・高取焼の茶陶